ガットからWTOへ

―貿易摩擦の現代史（ちくま新書）

著者：池田 美智子
出版社：筑摩書房
発行：1996 年 8 月



世の中には、今では当たり前のことだが、かつてはまったく違ったことが当然のこととして通用していた、ということがある。国際貿易についても、このことが言えると著者は言う。著者は１９２０年から１９３５年までの日本の国際貿易の状況を史的に調査し、特に、1930 年代において、日本が世界の市場から排除されていった様子を追っている。

「ＧＡＴＴ・ＷＴＯ体制の利益を世界で最も享受しているのは日本だ」と言われる。現在を生きる我々にとってみれば、ＷＴＯ体制の（無条件）最恵国待遇（ＭＦＮ）が当たり前のことになっているが、戦前はそうではなく、条件付最恵国待遇があった。資源のない日本には対外貿易が必要不可欠であった。だが、自らの植民地・支配地に工業製品を輸出していた先進諸国にとって、自らの植民地・支配地に「工業製品」を輸出してくる日本の登場は、驚きとともに「侵略」と見なされた。

日本の輸出攻勢（侵略）に対して、欧米諸国とその植民地や属領は、厳しい輸入規制をかけていった。米国の市場から、まさに差別的に締め出された貿易立国日本は、中東・アフリカへと自国製品の販路を開拓してゆく。するとやっと開拓した新たな販路である中東・アフリカでも（ここは当時、欧州諸国の植民地であった）、英仏独の先発工業国が、差別的な関税を用いて日本製品を排除してゆく。行き場のない日本は南米、蘭印（インドネシア）へと販路をのばす涙ぐましい努力をするが、そこにもアメリカやドイツの執拗な自由貿易への妨害が待っていた。
日本は追われ追われて、ついには外貨を稼ぐ市場すら探すことが出来なくなった。

日本が戦争へと突き進んでゆく原因にはさまざまなことがあっただろうが、対外貿易の販路をことごとく先発工業国に、差別的な貿易規制によって断たれたことが大きな原因の一つであると著者は結論している。日本の対外貿易をもっとも執拗に妨害したアメリカが戦後、自らも大きな痛手をうけた反省に立ち GATT から

WTO を推進したのは皮肉なことだった。

最後に、巷間 TPP 参加への議論がなされている。ＴＰＰは関税だけでなくて人の移動（労働力）、知的財産権、公共事業、保険、金融、通信のすべて規制を撤廃するというが、特定国同士のみが協定を結び関税を撤廃するというのは、一見、自由貿易に思えるが本当に自由貿易を推進することになるのだろうか。参加する特定国を優遇し、他の不参加国を排除することにならないのか、つまり、戦前の条件付最恵国待遇のようなものではないのか、という疑問を持った。

著者の著作では「対日経済封鎖――日本を追い詰めた 12 年」（日本経済新聞社）も興味深い。

大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室
指導主事 岡本利昭